

シェイクスピア劇の情報構造

——情報の受け皿——

市川真理子

Communication Mechanism in Shakespeare:

The Function of the News-Receiver

Mariko ICHIKAWA

In Shakespeare's plays there are many episodes in which a character brings news to another character. In such episodes information about an event, a situation, or the like is communicated to the audience not only by the character who plays the role of the news-deliverer but also by the one who plays that of the news-receiver. However, while the function of the former has been fairly well recognized, that of the latter has been underestimated, or rather almost completely overlooked. The aim of this paper is to reconsider the relationship between the two roles and to reevaluate the function of the news-receiver.

シェイクスピアは、その多作な劇作活動期を通して、ほぼ一貫して、物語や歴史等を題材として、無論種々様々の変更を施しながら、それを劇の形に変換するという態度を取り続けた。要するに、物語レベル上での変更と物語レベルからの変換。いずれの処理もわれわれにとって興味尽きることのない研究対象である。しかし、劇作家シェイクスピアの真価は、やはり、変換操作の技術にこそ求められよう。そうした認識から、今われわれは、変更の問題に直接関わることから一旦身を退いて、原典にほぼ忠実なものにせよ、あるいは大胆な変更を施したものにせよ、とにかく劇の伝達対象とされていると思われる物語を構成する諸情報が、いかなる形で劇を構成する情報として組み込まれているか、という問題に関心の的を絞ることにしよう。

ところで、前以て確認しておかなければならないことは、当然ながら、その質や種類にかかわらず、物語や劇を構成するあらゆる要素はいずれもまさに「情報」なのであって、だから、シェイクスピアの情報の処理ないしは伝達の技術とは、分析してし尽くせるようなものでは決してない、ということである。しかし、やはり、シェイクスピア劇の情報構造を眺め渡すのにふさわしい角度とそうではない角度とが確かにあって、つまり、あらゆる視点から分析するなどということは到底無理であり、もとより望むべくもないが、適切な視点からの分析を続けることによって、シェイクスピア劇の情報構造の特徴をかなりくっきりと浮かび上がらせることができるはずである。本論はそうした希望によって支えられている。

下の(1)は『リチャード二世』からの引用である。¹ いかなる出来事がいかなる形で観客に対して伝達されるようになっているかという観点から、それを見てみよう。

(1) *Green*. . . .

The banish'd Bullingbrook repeals himself,
And with uplifted arms is safe arriv'd
At Ravenspurgh.

Queen. Now God in heaven forbid!

Green. Ah, madam! 'tis too true, and that is worse,
The Lord Northumberland, his son young Harry Percy,
The Lords of Ross, Beaumont, and Willoughby,
With all their powerful friends, are fled to him.

Bushy. Why have you not proclaim'd Northumberland
And all the rest revolted faction traitors?

Green. We have, whereupon the Earl of Worcester
Hath broken his staff, resign'd his stewardship,
And all the household servants fled with him
To Bullingbrook.

(*Richard II*, II. ii. 49-61)

まず情報内容は、追放されていたプリングブルックの帰国と、それに付随する貴族たちの反逆ないしは逃亡。そして情報伝達の形は、と言うと、例えば、プリングブルックが登場する、つまり彼の帰国が観客に対して直接的に伝達ないしは表現される、という形にはなっていないで、グリーンが王妃やブッシーたちに知らせをもたらすという形、その意味では、上の出来事は観客に対して間接的に伝達されるようになっている。ここでわれわれは、まず何よりも、物語を構成する情報が、まさに「情報」、と言っても、狭義の、と言うか、劇世界において伝達される情報という形に仕立てられているという事実、換言すれば、究極的な受容者である観客に対する情報伝達のために、情報提供者の役割と情報受容者の役割とが劇の中に設けられて、一方がグリーンに、そして他方が王妃たちに割り当てられているという事実、それを確認しておくことにしよう。

さて、そのような情報伝達の形、それはシェイクスピア劇にはよく見られるものであるが、² それはいかなる目的で使われているのであろうか。あるいは、その本質は一体何なのか。この問題を考えるために、差し当たり今の例に関して、二つの役割自体とその割り当てとに分けて、それらのありようを順に観察してみることにする。

最初の課題は、二つの役割の内容、あるいはそれらの相互的關係を確認することである。われわれは(1)を情報提供者と情報受容者の対話として位置付けた際、そこに少なくとも王妃たちとグリーンとの呼応を読み取っていたはずである。だが、そうした呼応は、果たしてその二組が揃った時点以降に認められるものなのであろうか。多分そうではあるまい。なぜ

ならば、提供者は受容者のところこそ登場するのであり、逆に言えば、受容者は提供者を迎えるためにこそ前以て登場するのだから。とすれば、一応は、受容者側の人物たちの登場にまで遡って調べてみなければならぬだろう。

王妃たちの登場からグリーンの登場に至るまでの部分に目を移してみると、そこは下のような対話となっている。

(2) *Bushy*. Madam, your Majesty is too much sad.

You promis'd, when you parted with the King,
To lay aside life-harming heaviness
And entertain a cheerful disposition.

Queen. To please the King I did, to please myself
I cannot do it; yet I know no cause
Why I should welcome such a guest as grief,
Save bidding farewell to so sweet a guest
As my sweet Richard. Yet again methinks
Some unborn sorrow, ripe in fortune's womb,
Is coming towards me, and my inward soul
With nothing trembles; at some thing it grieves,
More than with parting from my lord the King.

Bushy. 'Tis nothing but conceit, my gracious lady.

Queen. 'Tis nothing less: conceit is still deriv'd
From some forefather grief; mine is not so,
For nothing hath begot my something grief,
Or something hath the nothing that I grieve—
'Tis in reversion that I do possess—
But what it is that is not yet known what,
I cannot name; 'tis nameless woe, I wot.

(II. ii. 1-13, 33-40)

それは、王妃はリチャードに別れを告げた後、今まさに時満ちて生まれ出ようとしている不幸の到来を予感して心樂しまず、プッシーの慰めにもかかわらず、どうしてもその心は、自分では名付けようもないものながら、自分のものになるであろうと確信する悲しみへと向かってしまうということを、要するに王妃の心境、と言うか、彼女の意識が向かっている方向を、直接的に伝達する対話である。さて、ここで王妃たちがまず登場して上の対話に参加することで果たす役割に焦点を合わせてまとめれば、王妃が不幸の産婆ないしは悲しみの名付親を、無論喜んでというわけではないが、少なくとも迎える心の構えにあるということ表現すること、つまり、そうした役割を果たすべき人物の登場を待つ（あるいは付添いとして一歩後ろに控えて）迎える位置に着くこと、もっとはっきり言えば、予め情報受容者側となっておくこと、突き詰めれば、観客に対して同様の準備態勢を整えさせること、これこそがその役割なのである。

このようにして、王妃たちが言わば情報の受け皿の用意を整えたところにグリーンは登場する。しかし、彼は例の情報を直ちに注ぎ始めるのであろうか。それとも、受け皿を確認するという手続きをまずは取るのであろうか。グリーンが登場した直後を見てみよう。

(3) *Green.* God save your Majesty! and well met, gentlemen.

I hope the King is not yet shipp'd for Ireland.

Queen. Why hopest thou so? 'Tis better hope he is,

For his designs crave haste, his haste good hope.

Then wherefore dost thou hope he is not shipp'd?

Green. That he, our hope, might have retir'd his power,

And driven into despair an enemy's hope,

Who strongly hath set footing in this land:

(II. ii. 41-48)

まず挨拶。これは、彼を迎えるという構えにあった人物たちに対して彼も向かうということだ。それから、王がまだ出帆していなければよいという希望の表明。彼は王の存在と希望とを同一視している。これは王の不在と悲しみを結び付けていた王妃の態度と、裏返しなから、一致するものだ。だが、それでいてなおかつ、王妃に疑念を表明させるに足るものでもある。要するに、迎えられたグリーンの方でも、自分が登場しないうちに予め整えられていた準備に対してまずは応じて、それを手掛かりとして情報提供者の位置に落ち着くのである。受け皿を認めて、それを自らが情報を注ぎ易い状態に固定するということから情報提供者の役割は始まっている、ということである。

このようにしてみると、最初に(1)として掲げた部分とは、情報受容者が整えた下準備をまず踏み固めた後で、情報提供者がいよいよその本領を發揮するという部分であり、知らせがもたらされるというエピソードの、言わば本体、ということになるうか。当然ながら、そこは、情報提供者が情報を注ぐということを持っていて、情報受容者が情報を受けながら反応を示すということの方は、ある意味では、付録のようなものである。³

ところで、この本体の部分に限りに両者の役割はいずれもすっかり終わっているのであろうか。(1)の後、新たにヨークが登場するまでの部分も見ておくことにしよう。

(4) *Queen.* So, Green, thou art the midwife to my woe,

And Bullingbrook my sorrow's dismal heir.

Now hath my soul brought forth her prodigy,

And I, a gasping new-deliver'd mother,

Have woe to woe, sorrow to sorrow join'd.

Bushy. Despair not, madam.

Queen. Who shall hinder me?

I will despair, and be at enmity

With cozening hope. He is a flatterer,

A parasite, a keeper-back of death,

Who gently would dissolve the bands of life,

Which false hope lingers in extremity.

(II. ii. 62-72)

王妃が、グリーンの情報提供行為を、彼女が予め取っていた情報受容者としての構えの結実として位置付けているのがはっきりと見て取れる。なお、それに際して最初に、'Green', 'thou' という記号の意味作用から明らかなように、彼女はグリーンに対して取っていた受容者とし

ての態度をまだ崩し切っていないということを、あらためて明確にしている。(彼女がその態度を完全に崩したとされているのは、同じく受容者の側にいたブッシーと向かい合って、再び(2)に見られたように、しかし「悲しみ」の代わりに「絶望」を主題として語るときである。)それに対して、グリーンの方は、もうここでは情報提供者としての態度を特に明らかにしてはいない。これは、情報提供者の存在はもはや観客に対して何ら意味を持たず、したがって情報提供者であるという情報を伝達するという自体も課せられていないのに対して、情報受容者の方は、観客のために、自らが予め設けておいた枠組みを再び持ち出してその枠組みの中で情報を整理するということまでその責任を負わされている、ということであろう。

ここまでを整理すれば、情報提供者ないしは情報受容者の役割は、確かに、端的には、情報を注ぐこと、あるいはそれを受けること、という行為自体に認められるのだし、もとよりわれわれはその行為の遂行者であると了解した結果として情報提供者だとか情報受容者だとか称するのである。しかし、上で見たように、決してその基本的行為だけが情報提供者や情報受容者の役割ではなくて、特に後者の場合、むしろその行為自体よりも前後の行為の方に比重が懸けられているようである。情報提供者と情報受容者の関係とは、主として狭義の情報提供行為に当たる側とその下地を作りさらに整理を施す側との関係、要するに、観客に対する情報提供行為を、両側に分かれて、と言うか、それよりはむしろ時間的に前後にずれるという方式で、共同的に果たす関係である、とっておいてよいだろう。

3

次の課題に移るが、それは割り当ての意義、すなわち、なぜ王妃たちが(差し当たりは、なぜ王妃が、でよいと思うが)情報受容者とされているのか、またなぜグリーンが情報提供者とされているのか、ということを考えることである。ところで、一つはっきりしていることは、情報の内容である出来事が最大の影響を及ぼすはずのリチャード自身は、上のいずれの役割からも完全に外されているということだ。これは、その影響で生ずる結果自体、つまりリチャードの退位、そして彼の死のありようこそが、まさにこれから終わりにかけて劇が伝達して行くべきことであるということと決して無関係ではあるまい。とすれば、これはプロット、つまり劇全体の情報伝達プログラムの問題である。さて、問題の性質が明らかになり、劇全体が一渡しに眺めることができる程に視野を広く取らなければならないことになったわけであるが、まずは、劇の基本的単位はシーンであるという認識に基づいて、第二幕第二場全体を眼下に収めてみることにしよう。

第二幕第二場は、大きく次の三つの部分に分けることができる。(a)II. 1-72, (b)II. 73-122, (c)II. 123-49. (a)がわれわれが扱っている部分であるが、(b)(c)それぞれの情報内容とそれに施されている処理についても見てみると、まず(b)は、ヨークの息子(オーマール)の(王のもとへの)出発と、やはりヨークの義妹にあたるグロスター公爵未亡人の死去とをその主な内容としていて、それはヨークのところに召使がもたらす知らせという形に処理されている。また(c)は王の取り巻き三人組がこの機にいかなる態度に出るかということ、直接彼らの対話という形で伝達する部分となっている。登場人物たちに焦点を合わせて整理すれば、第二幕第二場は、登場人物たちが情報提供者の側と情報受容者の側に分

けられている部分が二つと、その意味では全員が同列に並べられている部分の一つ、という三つの部分から構成されている。さて、三つの部分における上のような人物たちの登用には何らかの相互的関連性があるのであろうか。

今見たように、(a)(b)と、同様な形に整えられた部分が二つ続くわけであるが、(b)について再びもう少し丁寧に見ると、ヨークは最初から情報受容者の側に回っているわけではない。つまり、まずは既に登場していた王妃たちの方が、ヨークの登場とその登場の様子に心を向け、さらに彼が語るであろう言葉に思いを馳せるという態度を示すことで(II. 73-76)、情報受容者の側に収まって彼を迎え入れており、また登場するヨークの方でも、それに応じて情報提供者としての態度をまず一旦は示しているのであるが(II. 77-79)、結局は、彼もまた王が招いた「病める時」の到来に対する心構えを示すことで(II. 84-85)、彼が助力を求めべき者たちの不在と死去という情報を伝達する召使を迎える側に収まるのである。要するに、彼は提供者側から受容者側へと態度を180度転換するわけであるが、それに際して何らかの手続きを取っているのであろうか。中間部を見てみよう。

(5) *York*. . . .

Your husband, he is gone to save far off,
Whilst others come to make him lose at home.
Here am I left to underprop his land,
Who, weak with age, cannot support myself.

(II. ii. 80-83)

果たして、情報受容者の名乗りを上げる前に、まず自らの立場、と言うか、資格を表明している。すなわち、ヨークは、あくまでも「王の留守に王国を支えるべく残された者」という資格において受容者の位置に着くのだ、とはっきりと観客に告げているのである。

今、あからさまなまでの資格表明に触れたばかりの目で、(2)を再び読み直せば、王妃は受容者側に回るに際して、「王の留守を悲しみに暮れて過ごすより他なす術を知らぬ者」であると表明している、と読むことができる。王妃とヨークが、(a)(b)それぞれにおいて情報受容者として登用されている理由は、彼らが各々満たしていると表明している資格の共通項と差異にこそ求めることができるはずだし、またそうすべきであろう。とすれば、彼らは、両方とも王の不在を背負う身であるということのために、そして一方がもとより非力であり、他方が王の力となるべき者であるということのために、順次登用されているのだ、と見てよいだろう。逆に、結果的には、彼らは不在を語ることで王の影を存在させ、その影を帯び、まさに王の愛妃あるいは王権代行者として、ほとんど王の立場に立って情報を受け、一方はひたすら嘆くことで王の危機を確認し、また他方はその処置を施そうとして叶わず、王の危機をまたさらに強調している、と言えるが、このような結果を生み出すことこそ彼らを情報受容者として登用する目的であったはずである。⁴

情報提供者として登用されている人物たちの方に目を転じよう。(a)のグリーンについては既に見たが、(b)の召使にしてもやはり、まずは受容者‘you’を認めるという手続きは取っている(情報の受け皿の確認)。しかし、グリーンがその手続きに際して自身‘I’の心境にも触れて、結局、情報提供者となるための資格表明のようなことまでしているのに対して、召使の方は全くそれをしていない。無論、召使の台詞にも‘I’という記号は現象するが、それはあく

までもヨークの付属物的存在としての'I'であって彼個人を語るためのものではない。(と言うよりも、高々それだけの'I'の規定すら彼は直接的にしているわけではなくて、受容者'you'を'My lord'と称することで間接的にしているに過ぎないのである。)⁵ これは、情報こそが問題なのであって、提供者は原則としてはどのような人物であっても構わない、ということであろう。⁶ ところで、上のような両者の差異は、何よりも、一方の召使が情報提供という行為を果たした直後退場するのに対して、グリーンの方は行為を果たした後も残って、さらにはっきりと個人としての'I'を発揮して別の対話に参加する、ということに反映されている。例えば、無名の貴族だとか紳士などではなくて、グリーンが(a)の情報提供者とされているということは、その場限りの情報提供者役ではなくて、少なくとも(c)の対話に参加し得る人物が登用されているということであり、シーン内部における人物の登場・退場に関するエコノミー、つまりシーンの構成のエレガンスが目指されている、ということは確かであろう。付言すれば、それと全く同じことが、(a)でブッシーとバゴットが王妃の付添い役とされているということについても言えるはずである。

(b)の終わりに、ヨークは、'Gentlemen, will you go muster men?' (I. 108), 'Gentlemen, go muster up your men, And meet me presently at Berkeley.' (II. 118-19) と呼び掛け、少なくとも(b)の間中全く'I'を発揮することなく、目立たぬ存在のままであったブッシー、グリーン、バゴットの三人をまとめて前面に引き出すとともに、「彼らがすぐに取りべき行動」という主題を彼らの対話のために提示するという手続きを取って、退場する。しかし、残された三人は、直ちに各自が取るつもりの方の行動について語り始めはしない。下の(6)に見られるように、彼らもまた、いかなる資格でそれを語るかをまずは表明するのである。

(6) *Green.* Besides, our nearness to the King in love
Is near the hate of those love not the King.

Bagot. If judgment lie in them, then so do we,
Because we ever have been near the King.

(II. ii. 127-28, 133-34)

結局、彼らも王との緊密な関係性を資格としているわけで、そのうちの二人までが逃亡の意志表示をするということで、王の運命にいよいよ暗い影りを添えるのである。

ここで第二幕第二場の情報伝達のありようについてまとめれば、王と特別深い関係にあるという人物たちが情報受容者の側を受け持っているという枠組み付きで、あるいはそのような人物たちが参加する対話であるという前提条件で、既に起こった出来事だとか、参加者たちが取るであろう行動だとかいう、狭義の情報が観客に伝達されるようになっている、ということとその特徴、と言うか、その骨組みとしている。さて、それは、さらに視野を広げて、他のシーンとの関係においてこのシーンのありようを眺めたとき、いかなる価値を持つものとしてわれわれの目に映って来るだろうか。差し当たり、このシーンは前のシーンをいかに受けているのか、そして次のシーンをいかに導いているのか、それを見てもみることにしよう。

というわけで、まず第二幕第一場との関わりであるが、特にそのシーンの最後の部分、つまりノーサンバランドを始めとする貴族たちの対話となっている部分に注目してみよう。下の(7)はまたその末尾である。

(7) *North.* Then thus: I have from Le Port Blanc,
A bay in Britain, receiv'd intelligence
That Harry Duke of Herford, Rainold Lord Cobham,

.....
All these, well furnished by the Duke of Britain
With eight tall ships, three thousand men of war,
Are making hither with all due expedience,
And shortly mean to touch our northern shore.
Perhaps they had ere this, but that they stay
The first departing of the King for Ireland.
If then we shall shake off our slavish yoke,

.....
Away with me in post to Ravenspurgh;
But if you faint, as fearing to do so,
Stay, and be secret, and myself will go.

Ross. To horse, to horse! urge doubts to them that fear.

Willo. Hold out my horse, and I will first be there.

(II. i. 277-79, 285-91, 296-300)

要するに、プリングブルックの帰国とそれを知った貴族たちの王からの離反という出来事は、第一場の、しかも末尾で、まず一度伝達されるようになっているのである。確かに、こちらでは、もしかしたら既に起こったか、あるいはこれから起こるはずの出来事とされており、その意味では情報はなお不確実性を残すものとなっている。しかし、第二場で再び同じ出来事が今度は実際に既に起こったこととして扱われているのは、ただ単に情報の確実性が期されているということなのであろうか。そうではあるまい。なぜならば、第一場で上の情報の伝達に携わる人物たちは、第二場の人物たちとは全く対照的な資格で彼らの対話に参加しているからである。

それにしても、(7)のノーサンバランドの台詞冒頭に位置する 'Then thus' とは、非常に興味深い記号である。と言うのは、それは、彼がロスとウィラビーの二人が確かに情報受容者となるための資格を満たしているということを認定して、そうしたからこそ彼の方でも情報提供者の役割に収まるのだ、と意味作用するもの以外の何ものでもないからである。彼が確認したのは、受容者側となる他の二人も提供者側に回る彼も一体であるということであるとされているが、王一行の退場 (1. 223) 以降、彼らは異口同音にプリングブルックに対する同情と王に対する批判とを表明してきたわけで、彼らは親プリングブルックにして反リチャードであるという意味において一体であるということにははっきりしている。要するに、第一場では、まず、そのような立場を自ら表明する人物たちによって、プリングブルックの帰

国と彼ら自身の王からの離反とが伝達されるのである。

ここに至れば、第二場で同じ出来事が再び扱われることの意味はもう明らかだ。そう、視点の転換。一旦反リチャード派の目を通して伝達した出来事を、再びリチャード側の目を通して伝達し直すこと。敢えて単純な言い方をすれば、加害者リチャード・被害者ブリングブルックという構図を反転させて、加害者ブリングブルック・被害者リチャードという構図を生じさせること。⁷これは絶対に必要な手続きである。何しろ『リチャード二世』はまさしくリチャードの「生と死」を「悲劇」的に描こうとしているのだから。⁸

さらに第三場を見てみよう。帰国したというブリングブルックは、このシーンになってようやく登場する。彼はノーサンバランドに伴われて登場し、さらにその息子ハリー・パーシー、そしてロスとウィラビーを迎えて、結局王からの離反者たちを背後に従えた状態で、まずは使者のバークリーを、そして終にはヨークを迎える。バークリーが、彼は王権代行者としてのヨークの使者であると表明することで、結局はヨークがブリングブルックのところに登場する資格を前以て伝達しているのであるが(II. 76—78)、登場したヨーク自身も、彼はブリングブルックに叔父として対しているのではなくて、あくまでも王権を預かる者として対しているのだとその資格をはっきりと表明して、さらにブリングブルックの行為に「反逆」の名を与える。

(8) *Bull.* My gracious uncle—

York. Tut, tut!

Grace me no grace, nor uncle me no uncle.

I am no traitor's uncle, . . .

Com'st thou because the anointed King is hence?

Why, foolish boy, the King is left behind,

And in my loyal bosom lies his power.

. . .

Bull. My gracious uncle, let me know my fault,

On what condition stands it and wherein?

York. Even in condition of the worst degree,

In gross rebellion and detested treason.

(II. iii. 85—88, 96—98, 106—9)

これは、直接的なものではなくて、代行者の介在が認められるが、しかし、王とブリングブルックとの第一回目の対決、と言うか、もっと正確に言えば、ブリングブルックに対する王の(無駄な)抵抗だ。(ブリングブルックのところにヨークが登場するというシーンの構造は注目に値する。)結果は王側のあっけない抵抗解除(ヨークは中立の位置にまで引き下がる)。そして、最初の抵抗を難なくかわしたことに勢いを得て、ブリングブルックは自分の方から王の側に対して先制攻撃を仕掛ける(王の取り巻きを退治する)意志を表明する。以上が第三場の粗筋である。ここに明らかになっているように、ブリングブルックはこの第二幕第三場で実に第一幕第三場以来初めて登場するのであるが、それでいて既にもう王の優位に立っている者として登場するわけである。⁹しかし、これは唐突と呼ぶべきだろうか。いや、なぜならば、直前のシーンで、ブリングブルックは王の加害者としてしっかりと位置付けられたのだから。

第二の課題とは、第二幕第二場(a)において、なぜ王妃たちが情報受容者とされているのか、またなぜグリーンが情報提供者とされているのか、ということを考えることであったが、その割り当てが、小さくはそのシーンの、そして大きくは劇全体の、情報伝達プログラムの一環としていかに機能しているかということを見たことで、その課題を果たしたことにする。

最後に、途中で一旦整理を施した際に確認したことを思い出しながら、情報受容者と情報提供者との関係を整理し直せば、視点ないしは位置付けという価値に関わるものの方と、出来事という狭義のものの方とに分解された情報を別々に受け持って、それらを受容し合成すべき観客に対して、それぞれの情報を提供する分担者同士の関係である、と言うことができよう。

5

今回は、知らせという最も見易い形に処理されている情報を取り上げて、それが伝達されるために取られている手続きのありよう、と言うか、その手続き自体の情報としての価値に焦点を当ててみた。無論、その手続きという情報が伝達されるためにも、また何らかの手続きが踏まれているはずである。¹⁾と言うのは、劇とは、いや、劇に限らず、あらゆる時間芸術は、ある情報が別の情報を導入し、その意味を規定するという過程の集積である、と考えられるからだ。それにしても、何がある情報とされているか、そうして何がある情報に見合う別の情報とされているか、ということを考察してみるとして、シェイクスピア劇程に考察のし甲斐のあるものは、ジャンルを問わず、そう多くはあるまいと思われる。

注

¹ シェイクスピア劇のテキストは、G. Blakemore Evans, ed., *The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin, 1974)を使用する。

² See Bernard Beckerman, *Shakespeare at the Globe: 1599–1609* (New York: Macmillan, 1964), p. 205.

³ (1)の場合、王妃やブッシーの台詞が対話の進展に貢献しているということは見逃してはならないが、しかし、知らせがもたらされるというエピソードの中には、その本体が情報提供者の台詞だけで構成されているものも決して少なくはないのである。

⁴ シェイクスピアは、王妃を既に成年に達したらしい女性としたり、ヨークがグロスター公爵未亡人に助力を求めようとするとして、史実に対して変更ないしは創作を加えている。このような変更だとか創作は、劇というジャンルゆえにこそ可能となっている今の情報伝達の形を最大限に活用するために施された工夫であって、つまり変換に伴う変更とでも呼ぶべきものである。See Peter Ure, ed., *King Richard II: The Arden Shakespeare* (1956; rpt. London: Methuen, 1978), p. 69 n; Stanley Wells, ed., *King Richard The Second: The New Penguin Shakespeare* (Harmondsworth: Penguin Books, 1969), pp. 190–91. Cf. John Dover Wilson, ed., *King Richard II: The New Shakespeare* (1939; rpt. Cambridge: Cambridge University Press, 1976), pp. xlii–xliv; Geoffrey Bullough, ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. III (London: Routledge and Kegan Paul, 1960), p. 371, p. 377.

⁵ ベッカーマンは、シェイクスピア劇のメッセンジャーたちをグリーンのような型と召使のような型との二つの範疇に分類して、前者を“character messengers”, 後者を“formal messengers”と呼んでいる。(Beckerman, pp. 205–6.)

6 このことを、佐々木健一氏は、「伝令は人格性を備えた人物ではなく、いわば単なる言葉である」と表現しておられる。(『せりふの構造』(筑摩書房, 1982) p. 126.)

7 少し詳しく言えば、リチャード対プリングブルックというすっきりした構図は劇の最初から認められるものではない。確かに、リチャードが王権に寄り掛かって、プリングブルックに対して数々の害悪を及ぼしているということは、最初から第二幕第一場にかけて、劇が伝達していることのうちかなり大きな部分を占めるものではあるが、結局、絶対的優位者であるリチャードの被害者は複数に及んでいるとされているし、またそのうち特にプリングブルックがリチャードの対抗者とされているということもなく、と言うか、むしろ、彼はその位置から外されているからである。第二幕第一場最後のノーサンバランドたちの対話(II. 224-300)こそが、最大の被害者としてプリングブルックに焦点を合わせ、さらに彼をリチャードの対抗者としてしっかりと位置付けるものである。

なお、ウェルズは、第二幕第二場以降リチャードの描き方が好意的なものに変わっているということを指摘している。(Wells, p. 17, p. 21.)

8 第一・四つ折本₁ (1597)、第一・二つ折本 (1623) は、それぞれこの劇の表題を 'THE Tragedie of King Richard the second', 'The life and death of King Richard the Second' としている。("A Facsimile Series of Shakespeare Quartos" 70 vols., issued under the supervision of T. Otsuka (Tokyo: Nan'Un-Do, 1975); *The First Folio of Shakespeare: The Norton Facsimile*, prepared by Charlton Hinman (New York: W. W. Norton, 1968)に拠る。)

9 因みに、王は、第二幕第一場の途中で退場して、第三幕第二場冒頭までは登場しないのであるが、その間の数シーンの作用によって、次に彼が登場するときには、彼は「自覚がないままに、既に二敗も負ってしまった者」とされていて、彼がそれにもかかわらず「我が国土」に再び立った喜びを語ることによって哀愁が漂うようになっている。See Wells, p. 7.

10 例えば、第二幕第一場における王一行の退場の辺りを見てみよう。

K. Rich. . . . To-morrow next
We will for Ireland, and 'tis time, I trow.
And we create, in absence of ourself,
Our uncle York lord governor of England;
For he is just and always loved us well.
Come on, our queen, to-morrow must we part.
Be merry, for our time of stay is short.

(II. i. 217-23)

この台詞は、王のアイランドへの出発、留守中にヨークが果たすべき任務、別離と王妃の心持ちとの相関関係、という三つのことを「未来形」で伝達するものである。われわれは、次の第二場で、王妃とヨークが各自の心境ないしは立場を王の出発と関連付けて、言わば「現在完了形」で語ることが、いかに重要な手続きであるか、既に見たわけであるが、第一場で、王が王妃やヨークと共に退場する際に上の台詞を語っているということは、いずれ「完了形情報」に取って替わられるべき「未来形情報」の提供という手続きに携わっているということに他ならない。

1986. 9. 12 受理